校異源氏物語・玉かつら

年月へたゝりぬれとあかさりしゆふかほを露わすれ給はす心　くなる人のありさまともをみ給ひかさぬるにつけてもあらましかはとあはれにくちおしくのみおほしいつ右近はなにの人かすならねとなをそのかたみとみ給てらうたきものにおほしたれはふる人のかすにつかふまつりなれたりすまの御うつろひのほとにたいのうへの御方にみな人　くきこえわたし給しほとよりそなたにさふらふこゝろよくかいひそめたる物にをむな君もおほしたれと心のうちにはこきみものし給はましかはあかしの御方はかりのおほえにはおとりたまはさらましさしもふかき御心さしなかりけるをたにおとしあふさすとりしたゝめ給ふ御心なかさなりけれはまいてや事なきつらにこそあらさらめこの御とのうつりのかすのうちにはましらひ給なましと思ふにあかすかなしくなむ思ひけるかのにしの京にとまりしわか君をたにゆくゑもしらすひとへにものを思つゝみまたいまさらにかひなき事によりて我名もらすなとくちかため給しをはゝかりきこえてたつねてもをとつれきこえさりしほとにその御めのとのおとこ少弐になりていきけれはくたりにけりかのわかきみのよつになるとしそつくしへはいきけるはゝ君の御ゆくゑをしらむとよろつの神ほとけに申てよるひるなきこひてさるへき所ゝをたつねきこえけれとつゐにえきゝいてすさらはいかゝはせむ若君をたにこそは御かたみにみたてまつらめあやしきみちにそへたてまつりてはるかなるほとにおはせむ事のかなしきことなをちゝ君にほのめかさむと思けれとさるへきたよりもなきうちにはゝ君のおはしけむかたもしらすたつねとひ給はゝいかゝきこえむまたよくもみなれ給はぬにおさなき人をとゝめたてまつり給はむもうしろめたかるへししりなからはたいてくたりねとゆるし給へきにもあらすなとをのかしゝかたらひあはせていとうつくしうたゝいまからけたかくきよらなる御さまをことなるしつらひなき舟にのせてこきいつるほとはいとあはれになむおほえけるおさなき心ちにはゝ君をわすれすおり　くにはゝの御もとへゆくかととひ給につけて涙たゆるときなくむすめともゝ思こかるゝをふなみちゆゝしとかつはいさめけりおもしろきところ　くをみつゝ心わかうおはせし物をかゝるみちをもみせたてまつる物にもかなおはせましかはわれらはくたらさらまし

と京のかたを思やらるゝにかへるなみもうらやましく心ほそきにふなこともの
あら　くしきこゑにてうらかなしくもとをくきにけるかなとうたふをきくまま
にふたりさしむかひてなきけり

　ふな人もたれをこふとかおほしまのうらかなしけにこゑのきこゆる

　こしかたもゆくゑもしらぬおきにいてゝあはれいつくに君をこふらんひな
のわかれにをのかしゝ心をやりていひけるかねのみさきすきてわれはわすれす
なとよとゝものことくさになりてかしこにいたりつきてはまいてはるかなるほ
とを思ひやりてこひなきてこの君をかしつきものにてあかしくらすゆめなとに
いとたまさかにみえ給ときなともありおなしさまなる女なとそひ給ふてみえ給
へはなこり心ちあしくなやみなとしけれは猶よになくなり給にけるなめりと思
ひなるもいみしくのみなむせうににむはてゝのほりなとするにはるけきほとに
ことなるいきをいなき人はたゆたいつゝすか　くしくもいてたゝぬほとにをも
きやまひしてしなむとする心ちにもこの君の十はかりにもなり給へるさまのゆ
ゝしきまておかしけなるをみたてまつりて我さへうちすてたてまつりていかな
るさまにはふれ給はむとすらんあやしき所におひいて給もかたしけなく思きこ
ゆれといつしかも京にいてたてまつりてさるへき人にもしらせたてまつりて御
すくせにまかせてみたてまつらむにもみやこはひろき所なれはいと心やすかる
へしと思いそきつるをこゝなから命たへすなりぬる事とうしろめたかるおのこ
ゝ三人あるにたゝこの姫君京にいてたてまつるへき事を思へ我みのけふをはな
思ひそとなむいひをきけるその人の御ことはたちの人にもしらせすたゝむまこ
のかしつくへきゆへあるとそいひなしけれは人にみせすかきりなくかしつきき
こゆるほとに俄にうせぬれはあはれに心ほそくてたゝ京のいてたちをすれとこ
の少弐の中あしかりける国の人おほくなとしてとさまかうさまにおちはゝかり
て我にもあらてとしをすくすにこの君ねひとゝのひ給まゝにはゝ君よりもまさ
りてきよらにちゝおとゝのすちさへくはゝれはにやしなたかくうつくしけなり
心はせおほとかにあらまほしうものし給きゝついつゝすいたるゐ中人とも心か
けせうそくかるいとおほかりゆゝしくめさましくおほゆれはたれも　くきゝい
れすかたちなとはさてもありぬへけれといみしきかたわのあれは人にもみせて
あまになして我よのかきりはもたらむといひちらしたれはこ少弐のむまこはか
たわなむあんなるあたらものをといふなるをきくもゆゝしくいかさまにして宮
こにいてたてまつりてちゝおとゝにしらせたてまつらむいときなきほとをいと
らうたしと思きこえ給へりしかはさりともおろかには思すてきこえ給はしなと

いひなけくほと仏神に願をたてゝなむ念しけるむすめともゝおのこともゝとこ
ろにつけたるよすかともいてきてすみつきにたり心のうちにこそいそき思へと
京の事はいやとをさかるやうにへたゝりゆくものおほししるまゝによをいとう
きものにおほして年三なとし給廿はかりになり給まゝにおひとゝのほりていと
あたらしくめてたしこのすむ所はひせむの国とそいひけるそのわたりにもいさ
ゝかよしある人はまつこのせうにのむまこのありさまをきゝつたへて猶たえす
をとつれくるもいといみしうみゝかしかましきまてなむ大夫監とてひこのくに
ゝそうひろくてかしこにつけてはおほえありいきをひいかめしきつはものあり
けりむくつけき心の中にいさゝかすきたる心ましりてかたちある女をあつめて
みむと思けるこのひめ君を聞つけてゝみしきかたわありとも我はみかくしても
たらむといとねむころにいひかゝるをいとむくつけくおもひていかてかゝる事
をきかてあまになりなむとすといはせたりけれはいよ　くあやうかりてをして
このくにゝこえきぬこのをのこともをよひとりてかたらふ事は思ふさまになり
なはおなし心にいきをひをかはすへき事なとかたらふにふたりはおもむきにけ
りしはしこそにけなくあはれと思ひきこえけれをの　く我みのよるへとたのま
むにいとたのもしき人なりこれにあしくせられてはこのちかきせかいにはめく
らひなむやよき人の御すちといふともおやにかすまへられたてまつらすよにし
らてはなにのかひかはあらむこの人のかくねむころに思きこえ給へるこそいま
は御さいはゐなれさるへきにてこそはかゝるせかいにもおはしけめにけかくれ
給ともなにのたけき事かはあらむまけしたましゐにいかりなはせぬ事ともして
んといひをとせはいといみしときゝてなかのこのかみなるふこのすけなむ猶い
とたい　くしくあたらしき事なりこせうにのの給し事もありとかくかまへて京
にあけたてまつりてんといふむすめともゝなきまとひてはゝ君のかひなくてさ
すらへ給ひてゆくゑをたにしらぬかはりに人なみ　くにてみたてまつらむとこ
そ思にさる物の中にましり給なむ事とおもひなけくをもしらて我はいとおほえ
たかきみと思てふみなとかきておこすてなときたなけなうかきてからのしきし
かうはしきかうにいれしめつゝおかしくかきたりと思たることはそいとたみた
りけるみつからもこのいゑのしらうをかたらひとりてうちつれてきたり三十は
かりなるをのこのたけたかくもの　くしくふとりてきたなけなけれと思なしう
とましくあらゝかなるふるまひなとみるもゆゝしくおほゆいろあひ心ちよけに
こゑいたうかれてさへつりゐたりけさう人はよにかくれたるをこそよはひとは
いひけれさまかへたる春の夕暮なり秋ならねともあやしかりけりとみゆ心をや

ふらしとてをはおとゝいてあふこせうにのいとなさけひきらきらしくものし給
しをいかてかあひかたらひ申さむと思給しかともさる心さしをもみせきこえす
侍りしほとにいとかなしくてかくれ給にしをそのかはりにいかうにつかふまつ
るへくなむ心さしをはけましてけふはいとひたふるにしゐてさふらひつるこの
おはしますらむ女君すちことにうけ給れはいとかたしけなしたゝなにかしらか
わたくしの君と思申ていたゝきになむさゝけたてまつるへきおとゝもしふ　く
におはしけなる事はよからぬをむなともあまたあひしりてはへるをきこしめし
うとむなゝりさりともすやつはらをひとなみにはし侍なむや我君をはきさきの
くらゐにおとしたてまつらしものをやなといとよけにいひつゝくいかゝはかく
の給をいとさいわひありと思給ふるをすくせつたなき人にや侍らむ思はゝかる
事侍ていかてか人に御らむせられむと人しれすなけき侍めれは心くるしうみ給
へわつらひぬるといふさらになおほしはゝかりそ天下にめつふれあしおれ給へ
りともなにかしはつかふまつりやめてむくにのうちの仏神はをのれになむなひ
き給へるなとほこりゐたりそのひはかりといふにこの月はきのはてなりなとゐ
中ひたる事をいひのかるおりていくきはにうたよまゝほしかりけれはやゝひさ
しう思めくらして

君にもし心たかはゝまつらなるかゝみの神をかけてちかはむこの和歌はつ
かうまつりたりとなむ思ひ給るとうちゑみたるもよつかすうゐ　くしやあれに
もあらねは返しすへくも思はねとむすめともによますれとまろはましてものも
おほえすとてゐたれはいとひさしきに思わひてうち思けるまゝに

としをへていのる心のたかひなはかゝみの神をつらしとやみむとわなゝか
しいてたるをまてやこはいかにおほせらるゝとゆくりかによりきたるけはひに
おひへておとゝいろもなくなりぬむすめたちさはいへと心つよくわらひてこの
人のさまことにものし給をひきたかへいつらは思はれむを猶ほけ　くしき人の
かみかけてきこえひかめ給なめりやととききかすをいさり　くとうなつきてお
かしき御くちつきかなゝにかしらゐ中ひたりといふなこそ侍れくちおしきたみ
には侍らす宮この人とてもなにはかりかあらむみなしりて侍りなおほしあなつ
りそとてまたよまむと思へれともたへすやありけむいぬめりしらうかかたらひ
とられたるもいとおそろしく心うくてこのふむこのすけをせむれはいかゝはつ
かまつるへからむかたらひあはすへき人もなしまれまれのはらからはこのけむ
におなし心ならすとて中たかひにたりこのけむにあたまれてはいさゝかのみし
ろきせむも所せくなむあるへき中　くなるめをやみむとおもひわつらひにたれ

とひめ君の人しれすおほいたるさまのいと心くるしくていきたらしと思しつみ給へることはりとおほゆれはいみしき事を思かまへていてたついもうとたちもとしころへぬるよるへをすてゝこの御ともにいてたつあてきといひしはいまは兵部の君といふそそひてよるにけいてゝ舟にのりける大夫のけむはひこにかへりいきて四月廿日のほとにひとりてこむとするほとにかくてにくるなりけりあねのおもとはるいひろくなりてえいてたゝすかたみにわかれおしみてあひみむ事のかたきを思にとしへつるふるさとゝてことにみすてかたき事もなしたゝまつらの宮のまへのなきさとかのあねおもとのわかるゝをなむかへりみせられてかなしかりける

うき島をこきはなれてもゆくかたやいつくとまりとしらすもあるかな

ゆくさきもみえぬ浪路にふなてして風にまかするみこそうきたれいとあとはかなき心ちしてうつふし　く給へりかくにけぬるよしをのつからいひいてつたへはまけしたましゐにてをひきなむと思に心もまとひてはや舟といひてさまことになむかまへたりけれは思かたの風さへすゝみてあやうきまてはしりのほりぬひひきのなたもなたらかにすきぬかいそくの舟にやあらんちいさき舟のとふやうにてくるなといふものありかいそくのひたふるならむよりもかのおそろしき人のをひくるにやと思ふにせむかたなし

うきことにむねのみさはくひゝきにはひゝきのなたもさはらさりけりかはしりといふところちかつきぬといふにそすこしいき出る心ちする例のふなこともからとまりよりかはしりをすほとはとうたふこゑのなさけなきもあはれにきこゆふむこのすけあはれになつかしううたひすさみていとかなしきめこもわすれぬとて思はけにそみなうちすてゝけるいかゝなりぬらんはか　くしく身のたすけと思らうとうともはみないてきにけり我をあしとおもひてをひまとはしていかゝしなすらんと思にこゝろをさなくもかへりみせていてにけるかなとすこし心のとまりてそあさましき事を思つゝくるに心よはくうちなかれぬ胡の地のせいしをはむなしくすて　くつとすするを兵部の君きゝてけにあやしのわさやとしころしたかひきつる人の心にも俄にたかひてにけいてにしをいかに思らんとさま　く思つゝけらるゝかへるかたとてもそこところといきつくへきふるさともなししれる人といひよるへきたのもしき人もおほえすたゝひと所の御ためによりこゝらのとし月すみなれつるせかいをはなれてうかへる浪風にたゝよひて思めくらすかたなしこの人をもいかにしたてまつらむとするそとあきれておほゆれといかゝはせむとていそき入ぬ九条にむかししれりける人のゝこりたり

けるをとふらひいてゝそのやとりをしめをきて宮このうちといへとはかはかし
き人のすみたるわたりにもあらすあやしき市女あき人の中にていふせく世の中
をおもひつゝ秋にもなりゆくまゝにきしかたゆくさきかなしき事おほかり豊後
のすけといふたのもし人もたゝ水鳥のくかにまとへる心ちしてつれ　くにならは
はぬありさまのたつきなきを思にかへらむにもはしたなく心をさなくいてたち
にけるを思ふにしたかひきたりし物ともゝるいにふれてにけさりもとのくにゝ
かへりちりぬすみつくへきやうもなきをはゝおとゝあけくれなけきいとをしかれ
はなにかこの身はいとやすく侍り人ひとりの御身にかへたてまつりていつちも　くまかりうせなむにとかあるましわれらいみしきいきをひになりてもわか
君をさる物の中にはふらしたてまつりてはなに心ちかせましとかたらひなくさ
めて神仏こそはさるへきかたにもみちひきしらせたてまつり給はめちかきほと
にやはたの宮と申はかしこにてもまいりいのり申給しまつらはこさきおなしや
しろなりかのくにをはなれ給とてもおほくの願たて申給きいま都にかへりてか
くなむ御しるしをえてまかりのほりたるとはやく申給へとてやはたにまうてさ
せたてまつるそれのわたりしれる人にいひたつねてこしとてはやくおやのかた
らひし大とくのこれるをよひとりてまうてさせたてまつるうちつきては仏の御
中にははつせなむひのもとのうちにはあらたなるしるしあらはし給ともろこし
にたにきこえあむなりましてわかくにのうちにこそとをきくにのさかひとても
としへ給えれはわかきみをはましてめくみ給てんとていたしたてたてまつる殊
更にかちよりとさためたりならはぬ心ちにいとわひしくゝるしけれと人のいふ
まゝにものもおほえてあゆみ給いかなるつみふかき身にてかゝるよにさすらふ
らむわかおやよになくなり給へりとも我をあはれとおほさはおはすらむ所にさ
そひ給へもし世におはせは御かほみせ給へと仏をねんしつゝありけむさまをた
におほえねはたゝおやおはせましかはとはかりのかなしさをなけきわたり給へ
るにかくさしあたりて身のわりなきままにとりかへしいみしく覚つゝからうし
てつはいちといふ所に四日といふみのときはかりにいける心ちもせていきつき
給へりあゆむともなくとかくつくろひたれとあしのうらうこかれすわひしけれ
はせんかたなくてやすみ給このたのもし人なるすけゆみやもちたる人ふたりさ
てはしもなる物わらはなと三四人をんなはらあるかきり三人つほさうそくして
ひすましめくものふるきけす女ふたりはかりとそあるいとかすかにしのひたり
おほみあかしのことなとこゝにてしくはへなとするほとにひくれぬいゑあるし
のほうし人やとしたてまつらむとする所になに人のものし給そあやしき女とも

の心にまかせてとむつかるをめさましくきくほとにけに人ゝきぬこれもかちよりなめりよろしき女ふたりしも人ともそおとこ女かすおほかむめるむま四五ひかせていみしくしのひやつしたれときよけなるおとこともなとありほうしはせめてこゝにやとさまほしくしてかしらかきありくいとおしけれとまたやとりかへむもさまあしくわつらはしけれは人ゝはおくに入りほかにかくしなとしてかたへはかたつかたによりぬせ上なとひきへたてゝおはしますこのくる人もはつかしけもなしいたうかいひそめてかたみに心つかひしたりさるはかのよとゝもにこひなく右近なりけりとし月にそへてはしたなきましらひのつきなくなり行身を思ひなやみてこのみ寺になむたひ　くまうてける例ならひにけれはかやすくかまへたりけれとかちよりあゆみたへかたくてよりふしたるにこのふんこのすけとなりのせ上のもとによりきてまいり物なるへしおしきてつからとりてこれは御まへにまいらせ給へ御たいなとうちあはていとかたはらいたしやといふを聞に我なみの人にはあらしと思て物ゝはさまよりのそけはこのおとこのかほみし心ちすたれとはえおほえすいとわかゝりしほとをみしにふとりくろみてやつれたれはおほくのとしへたてたるめにはふとしもみわかぬなりけり三条ここにめすとよひよする女をみれは又みし人なりこ御方にしも人なれとひさしくつかふまつりなれてかのかくれ給へりし御すみかまてありし物なりけりとみなしていみしく夢のやうなりしうとおほしき人はいとゆかしけれとみゆへくもかまへす思わひてこの女にとはむ兵藤たといひし人もこれにこそあらめ姫君のおはするにやと思よるにいと心もとなくてこのなかへたてなる三条をよはすれとくひ物に心いれてとみにもこぬいとにくしとおほゆるもうちつけなりやからうしておほえすこそ侍れつくしのくにゝはたとせはかりへにけるけすの身をしらせ給へき京人よひとたかへにや侍らむとてよりきたりゐ中ひたるかいねりにきぬなときていといたうふとりにけり我かよはひもいとゝおほえてはつかしけれとなをさしのそけわれをはみしりたりやとてかほさしいてたりこの女のてをうちてあかおもとにこそおはしましけれあなうれしともうれしいつくよりまいり給たるそうへはおはしますやといとおとろ　くしくなくわかき物にてみなれしよを思ひ出るにへたてきにけるとし月かそへられていとあはれなりまつおとゝはおはすや若君はいかゝなり給にしあてきときこえしはとて君の御事はいひいてすみなおはしますひめ君もおとなになりておはしますまつおとゝにかくなむときこえむとて入ぬみなおとろきて夢の心ちもする哉いとつらくいはむかたなく思きこゆるひとにたいめしぬへき事よとてこのへたてによりきたりけとをくへ

たてつるひやうふたつものなこりなくをしあけてまついひやるへきかたなくなきかはすおひ人はたゝわか君はいかゝなり給にしこゝらのとしころ夢にてもおはしまさむ所をみむと大願をたつれとはるかなるせかいにて風のをとにてもえきゝつたへたてまつらぬをいみしくかなしと思におひの身ののこりとゝまりたるもいと心うけれとうちすてたてまつり給へる若君のらうたくあはれにておはしますをよみちのほたしにもてわつらひきこえてなむまたゝき侍といひつゝくれは昔そのおりいふかひなかりし事よりもいらへむかたなくわつらはしと思へともいてやきこえてもかひなし御かたはゝやうせ給にきといふまゝに二三人なからむせかへりいとむつかしくせきかねたりひくれぬといそきたちて御あかしの事ともしたゝめはてゝいそかせは中　くゝと心あはたゝしくてたちわかるもろともにやといへとかたみにともの人のあやしと思へけれはこのすけにもことのさまたにいひしらせあへす我も人もことにはつかしくはあらてみなをりたちぬ右近は人しれすめとゝめてみるになかにうつくしけなるうしろてのいといたうやつれてう月のひとへめくものにきこめ給へるかみのすきかけいとあたらしくめてたくみゆ心くるしうかなしとみたてまつるすこしあしなれたる人はとくみたうにつきにけりこの君をもてわつらひきこえつゝ初夜をこなふほとにそのほり給へるいとさはかしく人まうてこみてのゝしる右近かつほねは仏のみきのかたにちかきまにしたりこの御しはまたふかゝらねはにやにしのまにとをかりけるをなをこゝにおはしませとたつねかはしいひたれはおとことをはとゝめてすけにかう　くといひあはせてこなたにうつしたてまつるかくあやしき身なれとたゝいまのおほとのになむさふらひ侍れはかくかすかなるみちにてもらうかはしき事は侍らしとたのみ侍る中ひたる人をはかやうの所にはよからぬなまものともものあなつらはしうするもかたしけなき事なりとて物かたりいとせまほしけれとおとろ　くしきをこなひのまきれさはかしきにもよほされて仏をかみたてまつる右近は心のうちにこの人をいかてたつねきこえむと申はたりつるにかつ　くかくてみたてまつれはいまは思のことおとゝの君のたつねたてまつらむの御心さしふかゝめるにしらせたてまつりてさいわひあらせたてまつり給へなと申けりくに　くよりゐ中人おほくまうてたりけりこのくにのかみのきたのかたもまうてたりけりいかめしくいきをひたるをうらやみてこの三条かいふやう大ひさにはこと　くも申さしあか姫君たいにのきたのかたならすはたうこくの受領のきたのかたになしたてまつらむ三条らもすいふんにさかへてかへり申はつかうまつらむとひたいにてをあてゝねむしいりてをり右近いとゆゝしくも

いふかなと聞ていといたくこそゐ中ひにけれな中将殿は昔の御おほえたにいかゝおはしましゝましていまはあめのしたを御心にかけ給へる大臣にていかはかりいつかしき御中に御方しも受領のめにてしなさたまりておはしまさむよといへはあなかまたまへ大臣たちもしはしまて大弐のみたちのうへのしみつの御寺観世音寺にまいり給しいきおひはみかとのみゆきにやはおとれるあなむくつけとてなをさらに手をひきはなたすおかみ入てをりつくし人は三日こもらむと心さし給へり右近はさしも思はさりけれとかゝるついてのとかにきこえむとてこもるへきよし大とこよひていふ御あかし文なとかきたる心はへなとさやうの人はくた　くしうわきまへけれはつねのことにて例のふちはらのるりきみといふか御ためにたてまつるよくいのり申給へその人このころなむみたてまつりいてたるそのくわんもはたしたてまつるへしといふをきくもあはれなり法師いとかしこき事かなたゆみなくいのり申侍るしるしにこそ侍れといふいとさはかしうよ一夜をこなふなりあけぬれはしれる大とこのはうにおりぬものかたり心やすくとなるへし姫君のいたくやつれ給へるはつかしけにおほしたるさまいとめてたくみゆおほえぬたかきましらひをしておほくの人をなむみあつむれと殿のうへの御かたちにいる人おはせしとなむとしころみたてまつるをまたおひいて給姫君の御さまいとことはりにめてたくおはしますかしつきたてまつり給さまもならひなかめるにかうやつれ給へる御さまのおとり給ましくみえ給はありかたうなむおとゝの君ちゝみかとの御時よりそこらの女御きさきそれよりしもはのこるなくみたてまつりあつめ給へる御めにもたうたいの御はゝきさきときこえしとこの姫君の御かたちとをなむよき人とはこれをいふにやあらむとおほゆるときこえ給みたてまつりならふるにかのきさきの宮をはしりきこえす姫君はきよらにおはしませとまたかたなりにておひさきそをしはかられ給うへの御かたちはなをたれかならひ給はむとなむみ給殿もすくれたりとおほしためるをことにいてゝはなにかはかすへのうちにはきこえ給はむ我にならひ給へるこそ君はおほけなけれとなむたはふれきこえ給みたてまつるにいのちのふる御ありさまともをまたさるたくひおはしましなむやとなむ思侍にいつくかおとり給はむ物はかきりある物なれはすくれ給へりとていたゝきをはなれたるひかりやはおはするたゝこれをすくれたりとはきこゆへきなめりかしとうちゑみてみたてまつれはおひ人もうれしと思ふかゝる御さまをほと　くあやしき所にしつめたてまつりぬへかりしにあたらしくかなしうていゑかまとをもすておとこをんなのたのむへきこともにもひきわかれてなむかへりてしらぬよの心ちする京にまうて

こしあかおもとはやくよきさまにみちひきゝこえ給へたかき宮つかへし給人はをのつからゆきましりたるたよりものし給らむちゝおとゝにきこしめされかすまへられ給へきたはかりおほしかまへよといふはつかしうおほいてうしろむき給へりいてや身こそかすならねと殿も御まへちかくめしつかひ給へはものゝおりことにいかにならせ給にけんときこえいつるをきこしめしをきてわれいかてたつねきこえむと思をきゝいてたてまつりたらはとなむの給はするといへはおとゝの君はめてたくおはしますともさるやむ事なきめともおはしますなりまつまことのおやとおはするおとゝにをしらせたてまつり給へなといふにありしさまなとかたりいてゝよにわすれかたくかなしき事になむおほしてかの御かはりにみたてまつらむこもすくなきかさう　くしきに我子をたつねいてたると人にはしらせてとそのかみよりの給なり心のおさなかりける事はよろつにものつゝましかりしほとにてえたつねてもきこえてすこしゝほとにせうにゝなり給へるよしは御なにてしりにきまかり申しにとのにまいり給えりしひほのみたてまつりしかともえきこえてやみにきさりとも姫君をはかのありしゆふかほの五条にそとゝめたてまつり給へらむとそ思ひしあないみしやゐ中人にておはしまさましよなとうちかたらひつゝひひといむかしものかたりねむすなとしつゝまいりつとふ人のありさまともみくたさるゝかたなりまへより行水をはゝつせ川といふなりけり右近

二もとの杉のたちとをたつねすはふる河のへに君をみましやうれしきせにもときこゆ

はつせ河はやくの事はしらねともけふのあふ瀬に身さへなかれぬとうちなきておはするさまいとめやすしかたちはいとかくめてたくきよけなからゐ中ひこち　くしうおはせましかはいかにたまのきすならましいてあはれいかてかくおひいて給けむとおとゝをうれしく思はゝ君はたゝいとわかやかにおほとかにてやは　くとそたをやき給へりしこれはけたかくもてなしなとはつかしけによしめき給へりつくしを心にくゝ思なすにみなみし人はさとひにたるに心えかたくなむくるれは御たうにのほりてまたの日もをこなひくらし給秋風たによりはるかに吹のほりていとはたさむきにものいとあはれなる心ともにはよろつ思つゝけられて人なみ　くならむ事もありかたきことゝおもひしつみつるをこの人のものかたりのつゐてにちゝおとゝの御ありさまはら　くのなにともあるまし き御こともみな物めかしなしたて給をきけはかゝるしたくさたのもしくそおほしなりぬるいつとてもかたみにやとる所もとひかはしてもしまたをひまとはし

たらむときとあやうく思けり右近か家は六条の院ちかきわたりなりけれはほと
遠からていひかはすもたつきいてきぬる心ちしけり右近はおほとのにまいりぬ
この事をかすめきこゆるついてもやとていそくなりけり御かとひきいるゝより
けはひことにひろ　くとしてまかてまいりする車おほくまよふかすならてたち
いつるもまはゆき心ちするたまのうてなゝりその夜は御前にもまいらて思ひふ
したりまたのひよへさとよりまいれる上臘わか人とものなかにとりわきて右近
をめしいつれはおもたゝしくおほゆおとゝも御覧してなとかさとゐはひさしく
しつるそ例ならすやまめ人のひきたかへこまかへるやうもありかしおかしき事
なとありつらむかしなと例のむつかしうたはふれ事なとの給まかてゝ七日にす
き侍ぬれとおかしき事は侍かたくなむ山ふみし侍てあはれなる人をなむみ給へ
つけたりしなに人そとゝひ給ふふときこえいてんも又うへにきかせたてまつら
てとりわき申たらんをのちに聞給うてはへたてきこえけりとやおほさむなと思
みたれていまきこえさせ侍らむとて人　くまいれはきこえさしつおほとなふら
なとまいりてうちとけならひおはします御ありさまともいとみるかひおほかり
をむな君は廿七八にはなり給ぬらんかしさかりにきよらにねひまさり給へりす
こしほとへてみたてまつるはまたこのほとにこそにほひくはゝり給にけれとみ
え給かの人をいとめてたしおとらしとみたてまつりしかと思なしにや猶こよな
きにさいわひのなきとあるとはへたてあるへきわさかなとみあはせらるおほと
のこもるとて右近を御あしまいりにめすわかき人はくるしとてむつかるめり猶
としへぬるとちこそ心かはしてむつひよかりけれとの給へは人　くしのひてわ
らふさりやたれかそのつかひならひ給はむをはむつからんうるさきたはふれ事
いひかゝり給をわつらはしきになといひあへりうへもとしへぬるとちうちとけ
すきはたむつかり給はんとやさるましき心とみねはあやふしなと右近にかたら
ひてわらひ給いとあひきやうつきおかしきけさへそひ給へりいまはおほやけに
つかへいそかしき御ありさまにもあらぬ御身にて世中のとやかにおほさるゝま
ゝにたゝはかなき御たはふれ事をの給おかしく人の心をみ給あまりにかゝるふ
る人をさへそたはふれ給かのたつねいてたりけむやなにさまの人そたうときき
きやうさかたらひていてきたるかとゝひ給へはあなみくるしやはかなくきえ給
にしゆふかほの露の御ゆかりをなむみ給へつけたりしときこゆけにあはれなり
ける事かなとしころはいつくにかとの給へはありのまゝにはきこえにくゝてあ
やしき山さとになむ昔人もかたへはかはらて侍けれはそのよの物かたりしゐて
侍てたへかたく思給へりしなときこえゐたりよし心しり給はぬ御あたりにとか

くしきこえ給へはうへあなわつらはしねふたきに聞いるへくもあらぬ物をとて
御そてして御みゝふたき給つかたちなとはかのむかしの夕顔とおとらしやなと
の給へはかならすさしもいかてかものし給はんと思給へりしをこよなうこそお
ひまさりてみえ給しかときこゆれはおかしの事やたれはかりとおほゆこの君と
ゝのた給へはいかてかさまてはときこゆれはしたりかほにこそ思へけれ我にに
たらはしもうしろやすしかしとおやめきての給かくきゝそめてのちはめしはな
ちつゝさらはかの人このわたりにわたいたてまつらんとしころものゝついてこ
とにくちおしうまとはしつる事を思いてつるにいとうれしく聞いてなからいま
ゝておほつかなきもかひなきことになむちゝおとゝにはなにかしられんいとあ
またもてさはかるめるかかすならていまはしめたちましりたらんか中　くなる
事こそあらめわれはかうさう　くしきにおほえぬ所よりたつねいたしたるとも
いはんかしすきものともの心つくさするくさはひにていといたうもてなさむな
とかたらひ給へはかつ　くいとうれしく思つゝたゝ御心になむおとゝにしらせ
たてまつらむともたれかはつたへほのめかし給はむいたつらにすきものし給し
かはりにはともかくもひきたすけさせ給はむ事こそは罪かろませ給はめときこ
ゆいたうもかこちなすかなとほゝゑみなから涙くみ給へりあはれにはかなかり
ける契となむとしころ思わたるかくてつとへるかた　くのなかにかのおりの心
さしはかり思とゝむる人なかりしをいのちなかくてわか心なかさをもみ侍るた
くひおほかめる中にいふかひなくて右近はかりをかたみにみるはくちおしくな
む思ひわするゝときなきにさてものし給はゝいとこそほいかなう心ちすへけれ
とて御せうそこたてまつれ給かの末摘花のいふかひなかりしをおほしいつれは
さやうにしつみておひいてたらむ人のありさまうしろめたくてまつふみのけし
きゆかしくおほさるゝなりけりものまめやかにあるへかしくかき給てはしにか
くきこゆるを

　しらすともたつねてしらむみしまえにおふるみくりのすちはたえしをとな
むありける御文みつからまかてゝの給さまなときこゆ御さうそく人　くのれう
なとさま　くありうへにもかたらひきこえ給へるなるへしみくしけとのなとに
もまうけのものめしあつめて色あひしさまなとことなるをとえらせ給へれはゐ
中ひたるめともにはましてめつらしきまてなむ思けるさうしみはたゝかことは
かりにてもまことのおやの御けはひならはこそうれしからめいかてかしらぬ人
の御あたりにはましらはむとおもむけてくるしけにおほしたれとあるへきさま
を右近きこえしらせ人　くもをのつからさて人たち給ひなはおとゝの君もたつ

ねしりきこえ給なむおやこの御ちきりはたえてやまぬものなり右近かかすにも
侍らすいかてか御らむしつけられむと思給えしたに仏かみの御みちひき侍らさ
りけりやましてたれも　くたいらかにたにおはしまさはとみなきこえなくさむ
まつ御返をとせめてかゝせたてまつるいとこよなくゐ中ひたらむものをとはつ
かしくおほいたりからのかみのいとかうはしきをとりいてゝかゝせたてまつる
　かすならぬみくりやなにのすちなれはうきにしもかくねをとゝめけむとの
みほのかなりてはゝかなたちよろほはしけれとあてはかにてくちおしからねは
御心おちゐにけりすみ給へき御かた御らむするにみなみのまちにはいたつらな
るたいともなとなしいきをひことにすみゝち給へれははけせうに人しけくもある
へし中宮おはしますまちはかやうの人もすみぬへくのとやかなれとさてさふら
ふ人のつらにや聞なさむとおほしてすこしむもれたれとうしとらのまちのにし
のたいふとのにてあるをことかたへうつしてとおほすあひすみにもしのひやか
に心よくものし給御方なれはうちかたらひてもありなむとおほしをきつうへに
もいまそかのありし昔のよの物かたりきこえいて給けるかく御心にこめ給事あ
りけるをうらみきこえ給ふわりなしや世にある人のうへとてやとはすかたりは
きこえいてむかゝるついてにへたてぬこそは人にはことには思きこゆれとてい
とあはれけにおほしいてたり人のうへにてもあまたみしにいと思はぬ中も女と
いふ物の心ふかきをあまたみ聞しかはさらにすき　くしき心はつかはしとなむ
思しををのつからさるましきをもあまたみし中にあはれとひたふるにらふたき
かたはまたたくひなくなむ思いてらるゝよにあらましかはきたのまちにものす
る人のなみにはなとかみさらまし人のありさまとり　くになむありけるかとか
としうおかしきすちなとはをくれたりしかともあてはかにらうたくもありしか
ななとの給さりともあかしのなみにはたちならへ給はさらましとの給なをきた
のおとゝをはめさましと心をき給へりひめ君のいとうつくしけにてなに心もな
く聞給からうたけれはまたことはりそかしとおほしかへさるかくいふは九月の
事なりけりわたり給はむ事すか　くしくもいかてかはあらむよろしきわらはわ
か人なともとめさすつくしにてはくちおしからぬ人　くも京よりちりほひきた
るなとをたよりにつけてよひあつめなとしてさふらはせしも俄にまとひいて給
しさはきにみなをくらしてけれはまた人もなし京はをのつからひろき所なれは
いちめなとやうのものいとよくもとめつゝいてくその人の御子なとはしらせさ
りけり右近かさとの五条にまつしのひてわたしたてまつりて人ゝえりとゝのへ
さうそくとゝのへなとして十月にそわたり給おとゝひむかしの御かたにきこえ

つけたてまつり給あはれと思し人のものうしゝてはかなき山さとにかくれゐにけるををさなき人のありしかはとしころも人しれすたつね侍しかともえきゝいてゝなむをうなになるまてすきにけるをおほえぬかたよりなむきゝつけたるときにたにとてうつろはし侍なりとてはゝもなくなりにけり中将をきこえつけたるにあしくやはあるおなしことうしろみ給へ山かつめきておひいてたれはひなひたることおほからむさるへくことにふれてをしへ給へといとこまやかにきこえ給けにかゝる人のおはしけるをしりきこえさりけるよ姫君のひとゝころものし給かさう　くしきによき事かなとおひらかにの給かのおやなりし人は心なむありかたきまてよかりし御心もうしろやすく思きこゆれはなとの給つき　くしくうしろむ人なともことおほからてつれ　くに侍るをうれしかるへき事になむの給殿のうちの人は御むすめともしらてなに人またゝつねいて給へるならむむつかしきふる物あつかひかなといひけり御車三はかりして人のすかたともなと右近あれはゐ中ひすしたてたりとのよりそあやなにくれとたてまつれ給へるそのよやかておとゝのきみわたり給へり昔ひかる源氏なといふ御なは聞わたりたてまつりしかととしころのうゐ　くしさにさしも思きこえさりけるをほのかなるおほとなふらにみきちやうのほころひよりはつかにみたてまつるいとゝおそろしくさへそおほゆるやわたり給かたのとを右近かいはなてはこのとくちにいるへき人は心ことにこそとわらひ給いてひさしなるをましについゐ給てひこそいとけさうひたる心ちすれおやのかほはゆかしきものとこそきけさもおほさぬかとてき丁すこしをしやり給わりなくはつかしけれはそはみておはするやうたいなといとめやすくみゆれはうれしくていますこしひかりみせむやあまり心にくしとの給へは右近かゝけてすこしよすおもなの人やとすこしわらひ給けにとおほゆる御まみのはつかしけさなりいさゝかもこと人とへたてあるさまにもの給なさすいみしくおやめきてとしころ御ゆくゑをしらて心にかけぬひまなくなけき侍をかうてみたてまつるにつけても夢の心ちしてすきにしかたの事ともとりそへしのひかたきにえなむきこえられさりけるとて御めをしのこひ給まことにかなしうおほしいてらる御としのほとかそへ給ておやこのなかのかく年へたるたくひあらし物を契つらくもありけるかないまはものうゐ　くしくわかひ給へき御ほとにもあらしをとしころの御物かたりなときこえまほしきになとかおほつかなくはとうらみ給にきこえむ事もなくはつかしけれはあしたゝすしつみそめ侍にけるのち何事もあるかなきかになむとほのかにきこえ給こゑそ昔人にいとよくおほえてわかひたりけるほゝゑみてしつみ給けるをあはれともいまは

またたれかはとて心はへいふかひなくはあらぬ御いらへとおほす右近にあるへき事の給はせてわたり給ぬめやすく物し給をうれしくおほしてうへにもかたりきこえ給さる山かつの中にとしへたれはいかにいとをしけならんとあなつりしをかへりてこゝろはつかしきまてなむみゆるかゝるものありといかて人にしらせて兵部卿宮なとのこのまかきのうちこのましうし給心みたりにしかなすきものとものいとうるはしたちてのみこのわたりにみゆるもかゝるもののくさわひのなきほとなりいたうもてなしてしかな猶うちあはぬ人の気色みあつめむとの給へはあやしの人のおやゝまつ人の心はけまさむ事をさきにおほすよけしからすとの給まことに君をこそいまの心ならましかはさやうにもてなしてみつへかりけれいとむしんにしなしてしわさそかしとてわらひ給におもてあかみておはするいとわかくおかしけなりすゝりひきよせ給うててならひに

こひわたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちをたつねきつらむあはれ

とやかてひとりこち給へはけにふかくおほしける人のなこりなめりとみ給中将の君にもかゝる人をたつねいてたるをようゐしてむつひとふらへとの給けれはこなたにまうて給て人かすならすともかゝるものさふらふとまつめしよすへくなむ侍ける御わたりのほとにもまいりつかふまつらさりけることゝいとまめくしうきこえ給へはかたはらいたきまて心しれる人は思ふ心のかきりつくしたりし御すまゐなりしかとあさましうゐ中ひたりしもたとしへなくそ思くらへらるるや御しつらひよりはしめいまめかしうけたかくておやはらからとむつひきこえ給御さまかたちよりはしめ目もあやにおほゆるにいまそ三条も大弐をあなつらはしく思ひけるましてけむかいきさしけはひおもひいつるもゆゝしき事かきりなしふんこのすけの心はへをありかたきものに君もおほしゝり右近も思いふおほそうなるは事もをこたりぬへしとてこなたのけいしともさためあるへきことゝもをきてさせ給ふんこのすけもなりぬ年比ゐ中ひしつみたりし心ちに俄になこりもなくいかてかかりにてもたちいてみるへきよすかなくおほえしおほ殿のうちをあさゆふにいて入ならし人をしたかへ事をこなふ身となれはいみしきめいほくと思けりおとゝの君の御心をきてのこまかにありかたうおはします事いとかたしけなしとしのくれに御しつらひのこと人〻の御しやうそくなとやむ事なき御つらにおほしをきてたるかゝりともゐ中ひたることやと山かつのかたにあなつりをしはかりきこえ給てゝうしたるもたてまつり給ふついてにをり物とものわれもくと手をつくしてをりつゝもてまいれるほそなかこうちきの色くさまくなるを御覧するにいとおほかりける物ともかなかたくにう

らやみなくこそ物すへかりけれとうへに聞え給へはみくしけ殿につかうまつれるも此方にせさせ給へるもみなとうてさせ給へりかゝるすちはたいとすくれて世になき色あひにほひを染つけ給へはありかたしと思ひ聞え給ふこゝかしこのうち殿よりまいらせたるうち物とも御覧しくらへてこきあかきなとさま　くをえらせ給つゝ御そひつころもはこともに入させ給ふておとなひたるしやうらうともさふらひてこれはかれはととりくしつゝ入うへもみ給ていつれもおとりまさるけちめもみえぬ物ともなめるをき給はん人の御かたちに思よそへつゝたてまつれ給へかしきたる物のさまにゝぬはひか　くしくもありかしとの給へはおとゝうちわらひてつれなくて人の御かたちをしはからむの御心なめりなさてはいつれをとかおほすときこえ給へはそれもかゝみにてはいかてかとさすかはちらひておはすこうはいのいともむうきたるゑひ染の御こうちきいまやう色のいとすくれたるとはかの御れうさくらのほそなかにつやゝかなるかいねりとりそへてはひめ君の御れうなりあさはなたのかいふのをり物をりさまなまめきたれとにほひやかならぬにいとこきかいねりくして夏の御かたにくもりなくあかきにやまふきの花のほそなかはかのにしのたいにたてまつれ給をうへはみぬやうにておほしあはすうちのおとゝのはなやかにあなきよけとはみえなからなまめかしうみえたるかたのましらぬににたるなめりとけにをしはからるゝをいろにはいたし給はねと殿みやり給へるにたゝならすいてこのかたちのよそへは人はらたちぬへき事なりよきとても物ゝ色はかきりあり人のかたちはをくれたるも又なをそこひある物をとてかのするゑつむはなの御れうにやなきのをり物のよしあるからくさをみたれをれるもいとなまめきたれは人しれすほゝゑまれ給むめのおりえたてうとりとひちかひからめいたるしろきこうちきにこきかつやゝかなるかさねてあかしの御かたに思やりけたかきをうへはめさましとみ給うつせみのあま君にあをにひのをりものいと心はせあるをみつけ給て御れうにあるくちなしの御そゆるし色なるそへ給ておなし日き給へき御せうそこきこえめくらし給けにについたるみむの御心なりけりみな御返ともたゝならす御つかひのろく心　くなるにするゑつむひむかしの院におはすれはいますこしさしはなれえんなるへきをうるはしくものし給人にてあるへき事はたかへ給はす山ふきのうちきの袖くちいたくすゝけたるをうつほにてうちかけ給へり御ふみにはいとかうはしきみちのくにかみのすこしとしへあつきかきはみたるにいてや給へるは中

くにこそ

きてみれはうらみられけりからころもかへしやりてん袖をぬらして御ての

すちことにあふよりにたりいといたくほゝゑみ給てとみにもうちをき給はねはうへ何事ならむとみおこせ給へり御つかひにかつけたる物をいとわひしくかたはらいたしとおほして御気色あしけれはすへりまかてぬいみしくをののをのはさゝめきわらひけりかやうにわりなうふるめかしうかたはらいたき所のつき給へるさかしらにもてわつらひぬへうおほすはつかしきまみなりこたいのうたよみはからころもたもとぬるゝかことこそはなれねなまろもそのつらそかしさらにひとすちにまつはれていまめきたることの葉にゆるき給はぬこそねたきことはたあれ人のなかなる事をおりふしおまへなとのわさとあるうたよみの中にてはまとひはなれぬみもしそかしむかしのけさうのおかしきいとみにはあた人といふいつもしをやすめところにうちをきてことの葉のつゝきたよりある心ちすへかめりなとわらひ給よろつのさうしうた枕よくあなひしりみつくしてそのうちのこと葉をとりいつるによみつきたるすちこそつようはかはらさるへけれひたちのみこのかきをき給へりけるかうやかみのさうしをこそみよとておこせたりしかわかのすいなういとところせうやまひさるへき所おほかりしかはもとよりをくれたるかたのいとゝなか　くうこきすへくもみえさりしかはむつかしくてかへしてきよくあなひしり給へる人のくちつきにてはめなれてこそあれとておかしくおほいたるさまそいとをしきやうへいとまめやかにてなとてかへし給けむかきとゝめてひめ君にもみせたてまつり給へかりける物をこゝにもものゝなかなりしもむしみなそこなひてけれはみぬ人はた心ことにこそはとをかりけれとの給ひめ君の御かくもんにいとようなからんすへて女はたてゝこのめる事まうけてしみぬるはさまよからぬことなり何事もいとつきなからむはくちおしからむたゝこゝろのすちをたゝよはしからすもてしつめをきてなたらかならむのみなむめやすかるへかりけるなとの給て返しはおほしもかけねはかへしやりてむとあめるにこれよりをし返し給はさらむもひか　くしからむとそゝのかしきこえ給なさけすてぬ御心にてかき給いと心やすけなり

　かへさむといふにつけてもかたしきのよるの衣をおもひこそやれことはりなりやとそあめる